

令和7年度 墨田区立第三吾孺小学校 学校経営計画・経営報告書（自己評価・学校関係者評価）

作成者 校長 川中子登志雄（代表）

学校教育目標	自立・自ら学び、考え、行動する人 共生・思いやりをもち、共に生きる人 健康・しなやかで丈夫なこころからだをもつ人
目指す学校像	「すべてはみんなの笑顔のために」三吾小に集う子供、保護者・地域、そして教職員 すべての人の笑顔があふれる学校
目指す児童像	「学ぶ」ということを通して、思いやりの上に立つ真の教養と品格を身に付けようとする子供 そのために、主体的(Proactive)に生きる子供
目指す教師像	①教育への情熱と使命感にあふれる教師 ②自らも学び、子供と共に感動できる教師 ③社会人としての教養と品格のある教師

○令和7年度 学校経営計画における重点内容
 教育目標「自立 自ら学び、考え、行動する人」を重点目標とし、全教育活動を通して児童の主体性を育成する。令和7年度は、これまでに進めてきた「学習時間」「評価」「家庭学習」の改革を通して、令和の日本型学校である「子供が『主語』になる学校」づくりを推進する。
 ・教師主導の一斉指導から完全脱却し、児童が進める「セルフ授業」や「単元内自由進度学習」を日常の「学習時間」とする。
 ・児童の可能性を信じ、大胆な「課題解決学習・探求学習(Project-based Learning)」に挑戦させる。
 ・児童の主体性の育成を中心とした学校改革により、一体的に特別支援・インクルーシブ教育の充実、教職員の働き方改革を推進する。

項目	取組目標	具体的方策	取組指標		成果指標		分析	改善方策	学校関係者評価				
				評価		評価			自己評価	改善方策	意見等		
児童の教育（人権尊重教育・各教科指導等・生活指導）	【人権尊重】 全教育活動を通して、「思いやりをもち、共に生きる人」となる資質・能力を育成する。	協働的な学びを日常化し、児童が主体となる学級づくりを推進することによって、組織的にいじめや不登校の起こりにくい、心理的安全性の高い集団づくりを行う。	4	教アで95%以上の教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応したと回答	4	4	認知したいじめ問題に100%対応、95%以上改善・停止	4	心理的安全性の高い学級づくりが全教員で組織的に実施され、児童の安心感や関係づくりが日常化したことが、いじめ改善率の高さにつながったと考えられる。	児童同士の関係づくりをさらに深めるため、学級での対話活動や振り返りを体系化し、気になる兆候を早期に共有できる観察・報告の仕組みを強化する。	4	4	児童は素直で明るく、授業の雰囲気も楽しそうである。互いに思いやりをもって仲良く過ごしており、いじめ改善率の高さも評価できる。
			3	教アで90%以上の教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応したと回答		3	認知したいじめ問題に100%対応、90%以上改善・停止						
			2	教アで80%以上の教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応したと回答		2	認知したいじめ問題に100%対応、80%以上改善・停止						
			1	教アで教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応した教員が80%未満		1	認知したいじめ問題に100%対応、改善、停止80%未満						
	【特別支援・インクルーシブ教育】 個別最適な学びを保証し、個に応じた支援の一層の充実を図る。	特別支援部を中心に、関係諸機関と連携し、組織的に特別な配慮を要する児童(とその家庭)の支援にあたったと回答	4	教アで95%以上の教員が組織的に特別な配慮を要する児童(とその家庭)の支援にあたったと回答	4	4	不登校出現率7%以内かつ学校との接点維持98%以上	3	不登校出現率7.6%。特別支援部を中心とした組織的支援が機能し、関係機関連携や「みどり」の活用が児童の安心感を高め、登校状況や学校との接点維持に確実な成果が現れたと考えられる。	児童への支援をそろえるために、支援内容をこまめに話し合い、家庭や関係機関とも情報をこまめにやり取りする。また「みどり」利用の目的と成果を整理し、教員みんなで共有して支援の質を高める。	4	4	不安時に安心して駆け込める場として「みどり」が機能し、不登校改善にも大きく寄与している。特性に応じた丁寧な支援が行われており、今後は不登校だけでなくリピート率など多面的な指標での評価も有効である。
			3	教アで90%以上の教員が組織的に特別な配慮を要する児童(とその家庭)の支援にあたったと回答		3	不登校出現率8%以内かつ学校との接点維持98%以上						
			2	教アで80%以上の教員が組織的に特別な配慮を要する児童(とその家庭)の支援にあたったと回答		2	不登校出現率9%以内かつ学校との接点維持98%以上						
			1	教アで組織的に特別な配慮を要する児童(とその家庭)の支援にあたったと回答教員が80%未満		1	不登校出現率10%以上または学校との接点維持98%未満						
	【児童の主体性の育成】 児童が将来自らウェル・ビーイングを獲得できるようにするため、「自ら学び、考え、行動する」主体的な態度を身に付け、自己肯定感を高める。	年間専属講師の指導を受け、「児童の主体性の育成」をテーマに研究を行い、教師主導の一斉指導からの脱却を図り、児童が主体となる「学習時間」を創出する。	4	教アで85%以上の教員が当事者意識をもって研究に取り組んだと回答	4	4	児童アで「自分で考え、学習することができた」に85%以上回答	4	研究テーマが明確で、学習時間の導入が全教員で進み、児童が主体的に学ぶ姿が広がった。一方で、学級によって自分で考えて進める度合いに差が見られ、実践の深まりにばらつきが残った。	児童が学習を進めるための手順や役割をさらに統一し、学級差を縮める。成功している実践を共有し、専属講師の助言を生かして支援が必要な学級へのフォローを強化する。	4	4	児童は前向きに取り組んでおり意義深い実践だが、専属講師の助言など一部でさらなるフォローが必要に感じられた。クラス間のばらつきは保護者の不安にもつながり得るため、時間をかけた定着が望まれる。
			3	教アで75%以上の教員が当事者意識をもって研究に取り組んだと回答		3	児童アで「自分で考え、学習することができた」に75%以上回答						
			2	教アで70%以上の教員が当事者意識をもって研究に取り組んだと回答		2	児童アで「自分で考え、学習することができた」に70%以上回答						
			1	教アで当事者意識をもって研究に取り組んだと回答した教員が70%未満		1	児童アで「自分で考え、学習することができた」と回答した児童が70%未満						
	【学力の向上】 1 主体的・対話的で深い学びを実現させるために、これまでの指導法を見直し、児童主体の学習時間を創出する。 2 6年間を通じて、主体的な家庭学習の習慣を身に付けさせる。	ノーチャイム、ノー号令の取組や、異学年交流による「遊び」の時間を通して、児童の主体性を向上させる。教員は、できる限り「子供に任せる」ようにする。	4	教アで80%以上の教員が「子供に任せることができた」と回答	4	4	児童アで「時間を意識して行動している」に85%以上が肯定的回答	4	ノーチャイムや縦割り遊びが定着し、児童が時間を意識して行動したり、自ら動いて交流を広げる姿が多く見られた。主体性の発揮が日常化し、効果が高く表れた。	異学年交流の場面をさらに多様化し、児童が役割や活動内容を自分たちで決められる機会を増やす。教師は見守りを強化し、子供同士で課題解決できる環境を整える。	4	4	子供たちは時間を意識して主体的に行動できており、行事でも自分たちで判断して動いている。ノーチャイム・ノー号令も浸透しつつあり、今後はボランティアへの周知が必要である。
			3	教アで70%以上の教員が「子供に任せることができた」と回答		3	児童アで「時間を意識して行動している」に75%以上が肯定的回答						
			2	教アで60%以上の教員が「子供に任せることができた」と回答		2	児童アで「時間を意識して行動している」に70%以上が肯定的回答						
			1	教ア「子供に任せることができた」と回答した教員が60%未満		1	児童アで「時間を意識して行動している」と肯定的回答が70%未満						
【学力の向上】 1 主体的・対話的で深い学びを実現させるために、これまでの指導法を見直し、児童主体の学習時間を創出する。 2 6年間を通じて、主体的な家庭学習の習慣を身に付けさせる。 3 児童の自己肯定感を高めるための形成的評価の充実を図る。	7月までに児童が自ら学習を進める「学習時間」を日常化し、単元内自由進度学習等、複線型の学習スタイルを確立する。 年間を通して、PBL(探求・課題解決学習)に挑戦させる。	4	教アで80%以上の教員が「計画通りに実践し、教員の役割を理解することができた」と回答	4	4	児童アで「学習の時間があつという間に過ぎることがあった」に80%以上回答	2	肯定的回答は66.8%。学習時間の定着や自由進度学習が概ね実施され、児童の主体的な学びが広がった。一方、学級間で取り組みの深まりに差があり、PBLの質や進め方にばらつきが見られた。	学習時間の進め方やPBLの基本手順を共通化し、教師間で成功事例を共有する。学級差を縮めるため、支援が必要な学級への伴走を強め、児童の主体的学びをさらに安定させる。	4	3	児童が進める力は技術であり、基本手順の共有などフォローが見えにくい面もある。主体的な学習には考え方やコツの指導が必要で、成果指標も目標とより結びつけていくことが望まれる。	
		3	教アで70%以上の教員が「計画通りに実践し、教員の役割を理解することができた」と回答		3	児童アで「学習の時間があつという間に過ぎることがあった」に70%以上回答							
		2	教アで60%以上の教員が「計画通りに実践し、教員の役割を理解することができた」と回答		2	児童アで「学習の時間があつという間に過ぎることがあった」に60%以上回答							
		1	教アで「計画通りに実践し、教員の役割を理解することができた」と回答した教員が60%未満		1	児童アで「学習の時間があつという間に過ぎることがあった」に60%以上未満							
	低学年「課題」、中学年「計画表」、高学年「自学のすすめ」による「学び方の指導」を通して、家庭学習の習慣化を図る。	低学年「課題」、中学年「計画表」、高学年「自学のすすめ」による「学び方の指導」を通して、家庭学習の習慣化を図る。	4	教アで80%以上の教員が「発達度に応じて指導を行い、「自学」の習慣をつけることができた」と回答	4	4	児童アで「自学は自分で進めることができた」に90%以上回答	3	学び方の指導は計画通り実施され、一定の習慣化が進んだが、児童アンケートでは「自分で進められる」が84%に留まり、家庭学習の質と主体性にまだ個人差が残っている。	学年に応じた学習計画の立て方をさらに丁寧に指導し、家庭学習の見通しを持つための活動を増やし、児童自身が家庭学習を工夫できるよう支援する。	3	3	保護者は学校に任せすぎている面も見られる一方、児童が肯定的に受け止めている点はよい。取組は始まったばかりで効果は評価しにくく、不安を抱く家庭もまだ多いと考えられる。
			3	教アで70%以上の教員が「発達度に応じて指導を行い、「自学」の習慣をつけることができた」と回答		3	児童アで「自学は自分で進めることができた」に80%以上回答						
			2	教アで60%以上の教員が「発達度に応じて指導を行い、「自学」の習慣をつけることができた」と回答		2	児童アで「自学は自分で進めることができた」に70%以上回答						
			1	教アで「発達度に応じて指導を行い、「自学」の習慣をつけることができた」と回答した教員が60%未満		1	児童アで「自学は自分で進めることができた」に70%以上未満						
	4月、7月に形成的評価に関する研修会を実施し、組織的に「見取りと評価」の仕方について資質・能力の向上を図る。 OPPシートを使った形成的評価で、児童の学習状況を記録し、これまでの通知表に代わる学習状況の説明資料とする。	4月、7月に形成的評価に関する研修会を実施し、組織的に「見取りと評価」の仕方について資質・能力の向上を図る。 OPPシートを使った形成的評価で、児童の学習状況を記録し、これまでの通知表に代わる学習状況の説明資料とする。	4	教員の80%が5月からOPPシートを活用し、自らの資質・能力の向上を図ることができた。	3	4	保アで「学校は、子供の学習状況について説明している」に80%以上回答	1	研修やOPPAは運用されたが、面談で保護者への説明が十分に伝わらず、学習状況の共有が不十分だった学級も見られた。面談時間が短く、説明が不十分で子供の成長を伝えきれなかった。	面談時間を見直し、OPPAやキャリアパスポート等の記録を保護者に説明する方法を全体で事前確認し、各担任が面談で子供の成長を的確に伝えられるようにする。	3	3	面談時間の延長を望む声があり、学校からの継続的な説明も求められている。
			3	教員の80%が6月からOPPシートを活用し、自らの資質・能力の向上を図ることができた。		3	保アで「学校は、子供の学習状況について説明している」に75%以上回答						
			2	教員の80%が7月からOPPシートを活用し、自らの資質・能力の向上を図ることができた。		2	保アで「学校は、子供の学習状況について説明している」に70%以上回答						
			1	教員の80%が9月からOPPシートを活用し、自らの資質・能力の向上を図ることができた。		1	保アで「学校は、子供の学習状況について説明している」に70%未満						

項目	取組目標	具体的方策	取組指標		成果指標		分析	改善方策	学校関係者評価				
				評価		評価			自己評価	改善方策	意見等		
家庭・地域連携	【開校150周年記念事業】 保護者・地域と連携し、開校150周年記念事業を推進する。これを通し、地域を愛し、誇りに思う児童の心情を育てる。	学校行事を「開校150周年記念」の行事として実施することにより、児童の郷土愛や愛校心を育む。行事の計画立案には、必ず児童が関わるようにして、児童が主体的に150周年を祝う機会とする。	4	月に2回ほど計画的に150周年記念に絡む学習時間を実践した	3	4	児童アで「150周年行事を通して、学校や地域が好きになった」に90%以上が肯定的回答	3	周年事業を通して児童の主体的参加が進み、地域への愛着は高まったが、活動規模や関わり深さに学級差があり、十分に全児童へ波及しきらなかったこと。児童アンケートの実施時期が行事終了後じかんがたっていたことが評価3の要因と考えられる。	児童の役割をより明確にし、全学年が主体的に関われる活動を増やす。今後も、地域の人との交流する機会を設け、地域への誇りを育む。	4	4	町会との関わりが増え、地域イベントに参加する児童も増加した。150周年の多様な行事は児童の記憶に残り、学校全体が良い雰囲気になっていった。
			3	月に1回ほど計画的に150周年記念に絡む学習時間を実践した		3	児童アで「150周年行事を通して、学校や地域が好きになった」に80%以上が肯定的回答						
			2	2か月1回ほど計画的に150周年記念に絡む学習時間を実践した		2	児童アで「150周年行事を通して、学校や地域が好きになった」に70%以上が肯定的回答						
			1	特に意識することなく学習時間を実践した		1	児童アで「150周年行事を通して、学校や地域が好きになった」と肯定的回答が70%未満						
	【地域と協働した子育て】 地域の教育財産を生かし、地域から学ぶ機会を教育活動に位置づける。	年間を通して、ゲスト・ティーチャーによる体験的な学習の充実を図る。9月のキャリア教育特別授業等、各学年・年3回以上の特別授業の実施を目指す。	4	ゲストティーチャーを活用した授業を年間で3回以上実施、全体で20回以上実施	4	4	児童アで90%以上が「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」と回答	4	計画どおりに特別授業を充実させ、回数・質ともに高い水準で実施できたことが、児童の学習意欲や満足度の高さに繋がった。地域人材の活用が効果的に機能している。(各学年7.3回実施)	より多様な地域人材や職種とつながり、学年の学びに合った体験を広げる。学習後のふり返りを体系化し、地域との継続的な連携につなげることで学びの質をさらに高める。	4	4	キャリア教育や地域との交流は継続を望む声が多く、今後も続けてほしいという意見が多い。
			3	ゲストティーチャーを活用した授業を年間で3回実施、全体で18回以上実施		3	児童アで80%以上が「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」と回答						
			2	ゲストティーチャーを活用した授業を年間で2回以上実施、全体で15回以上実施		2	児童アで70%以上が「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」と回答						
			1	ゲストティーチャーを活用した授業を年間で2回未満実施、全体で12回未満実施		1	児童アで「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」の回答が70%未満						
	【開かれた学校】 積極的に教育活動の情報発信を行い、保護者・地域の学校教育への理解を深め、教育活動への参画を促す。	HP、学校便り、学校公開、動画通信、校長「語りサロン」等を通して、学校の教育活動を発信するとともに、各種アンケート等を実施し保護者・地域の願いやニーズを把握する。	4	保アで90%以上が「学校は積極的に情報を発信している」と回答	3	4	保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答90%以上	2	多様な手段で発信しているが、情報が保護者に届きにくい、または伝わり方にばらつきがあり、活動の意図や成果が十分に理解されていないことが評価低下の要因となった。(メール開封率65%程度で、連絡そのものが届いていない。)	情報を簡潔にまとめ、写真や動画で「学校の今」を直感的に伝える工夫を強化する。発信の頻度と媒体を整理し、保護者が必要な情報にアクセスしやすい形へ改善する。	3	3	学校の発信は充実しているが、受け取りには家庭差がある。タブレットへの発信を望む声もあり、今後も継続的な情報提供が期待されている。
			3	保アで85%以上が「学校は積極的に情報を発信している」と回答		3	保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答80%以上						
2			保アで80%以上が「学校は積極的に情報を発信している」と回答	2		保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答70%以上							
1			保アで「学校は積極的に情報を発信している」と回答とした保護者が80%未満	1		保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答70%未満							
学校の管理運営・教職員	【教職員の服務の厳正】 教育公務員としての自己の職責を理解し、使命をまっとうする教職員集団づくりを行う。	服務事故防止研修会を毎月実施し、服務事故を起こさない、起こさせない教職員集団の気運を醸成する。	4	教アで90%以上の教員が当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答	4	4	事故件数0、保アで教職員の信頼度90%以上	1	毎月の研修により意識づけは進んだが、残念ながら不適切な指導が1件発生してしまった。教職員同士の関係で、悩んでいる教員を支えきれなかったことが事故発生につながっている。	事例に基づく演習型研修を強化し、実際の場面での判断基準を共有する。管理職と職員間で日常的に声かけや確認を行い、迷った時にすぐ相談できる体制を整えて再発を防ぐ。	4	3	大きな問題は見られないが、服務事故の要因分析と再発防止の取組は必要である。事案を丁寧に把握して改善を図っている点は評価できる。
			3	教アで85%以上の教員が当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答		3	事故件数0、保アで教職員の信頼度85%以上						
			2	教アで80%以上の教員が当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答		2	事故件数0、保アで教職員の信頼度80%以上						
			1	教アで当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答した教員が80%未満		1	服務事故発生、または保アで教職員の信頼度80%未満						
	【教職員の働き方改革】 学校改革を一体的に推進し、教職員の過重労働を解消する。	研究を中心に学校改革を推進し、一体的に教職員の働き方を改善する。週あたり在勤時間50時間超の教職員を20%以下に抑え、教職員に年6日以上の「充電休暇」を取得できる環境を整える。	4	長時間勤務職員調査での「週あたり在勤時間50時間以内」の達成率が80%以上	1	4	R7ストレスチェック総合健康リスク100%未満	4	達成率は48%で、年々向上はしているものの、目標値には届いていない。男性教員は在勤時間が短く、働き方の改善が進んでいる一方、女性教員の在勤時間が長く、負担が偏っている恐れがある。	校務分掌の業務分担を見直し、女性教員に集中している負担を全体で分散する。事務作業の共同化や役割調整を進めるとともに、働き方に対する意識改革をさらに推進し、誰もが在勤時間50時間以内で働ける体制を整え、休暇を取りやすくする。	3	3	良い人材確保のためにも職場環境の改善は必要で、改善の兆しも見られる。働きやすさは教員ごとに異なるため、達成率だけで評価するのは適切でない。
			3	長時間勤務職員調査での「週あたり在勤時間50時間以内」の達成率が70%以上		3	R7ストレスチェック総合健康リスク100%						
			2	長時間勤務職員調査での「週あたり在勤時間50時間以内」の達成率が60%以上		2	R7ストレスチェック総合健康リスク104%						
			1	長時間勤務職員調査での「週あたり在勤時間50時間以内」の達成率が60%未満		1	R7ストレスチェック総合健康リスク106%以上						

○令和7年度 学校経営報告のまとめ(総括)

今年度は、本校開校150周年記念の年で、学校だけでなく、保護者・地域とともに盛大に周年を祝うことができたのは大変良かった。子供たち及び地域の皆様の記憶に残る1年になったことと思う。記念事業を支えてくださった地域の実行委員会の皆様、墨田区の関係者の皆様には深く感謝の意を表したい。

また、今年度はこれまで墨田区教育委員会「特色ある学校づくり推進校(令和5年度)」「研究協力校(令和6、7年度)」として進めてきた学校教育改革を広く公表し、総括を行う年でもあった。重点目標に掲げた「自立 自ら学び、考え、行動する人」、児童の主体性を育成するために、様々な改革を推進してきた。令和8年2月10日に研究発表会を行い、多くの参加者に現在の進捗状況を報告することができた。改革目標に対する達成度は、いまだ道半ばではあるが、これまでに得た成果と課題を整理しながら、来年度以降さらに「子どもが『主語』になる学校」づくりに努めていきたい。